

第10回演奏会を終えて

～とりあえずの感想～

神谷伸行

皆さん、おつかれさまでした。

今回の演奏会、団の皆さんの気持ち・表情、お客様の反応、アンケート結果から判断して、大(?)成功と言ってよいのではないのでしょうか。ステージに花を添えてくださったソリストの方々、忙しいスケジュールの合間を縫って入場無料の演奏会を快く引き受けていただいた弦楽アンサンブルの皆さん、そしてその素敵なアンサンブルを招いてくださり、日頃の練習でも本当に支えてくださった石川先生、合瀬さん・若杉さん・実行委員長波多野さんはじめ目に見えない苦労も重ねてくださった役員の皆さん、暗譜練習に向けて執念を燃やし続けてくださった技術委員長伊藤さんはじめ技術スタッフの皆さん、そして厳しい練習に耐えて来られて見事にあれだけの拍手を呼び込む成果を出し切った団員の皆さん、本当におつかれさまでした。私の大学グリー時代からの友人で、現在名古屋二期会でも活躍中のH氏も「旭混声って、こんなに上手だったっけ？」とメッセージを送ってくれました。もちろん技術面・運営面など、アンケート結果も参考にしながら今後に向けての課題を出して検討していく必要がありますし、録音を聴いたら反省点も多かろうと思いますが、ひとまずホッとしているところです。私自身、前回よりも気持ちよく振ることができました。

今回の演奏会は、30周年記念だけれど何となく「あまり派手にせず、そっと通過したい」感が皆さんの中であって、あり方を模索する時期がありました。偏に私のわがままで4ステージ構成でしかも記念ステージを入れるなど、かなり無理を強いたのではないかと思います。しかし、結果は見事な出来でした。アンコールが終わって、最後に登場するつもりはなかったのですが、万雷の拍手に導かれてノコノコとステージに出てしまいました。でも、それでよかったと思っています。あの拍手は真実を語っていたのだと思います。

私自身の反省。実は当初「初心のうた」をメインステージにしたいと考えていました。そのため前回の演奏会よりも前から音取りを始めていましたが、せっかくの記念演奏会だからと欲張り根性が邪魔をして企画ステージやオケ付きミサを入れてしまった結果、「初心のうた」の、特に4・5番がやや手薄になってしまったのかなと思います。何とか形にはなったと思いますが、これは大きな反省でした。また、今回取り上げたシューベルトのミサは自分としてはよくわかっているつもりでしたが、なにぶんオケ付き曲に不慣れなためいろいろとご迷惑をかけたこともあったかと思えます(しかし、歌と弦ではとりわけフレーズの始まりが微妙にずれるなど、合唱団としても大いに勉強になりましたよね)。でも、アンコールの「ラシーヌ讃歌」も、当初は到底無理と思っていただけに(失礼!）、本番は「これは奇跡が起こってるぞ」という心持ちで振っていました。やればできるじゃないですか。You can do it.

Ars longa, vita brevis. (芸術は長く人生は短し)

演奏会イコール日頃の苦労の発表会ではありません。日頃の練習では苦労するけれど、その苦勞を乗り越えて新しい価値を産みだし、それを提供できるだけの技術・精神を培うことに意義があり、そうして伝えられたものは聴衆の心の琴線に触れることができる。前回の演奏会の総括で私はこう書きました；良い演奏に必要な要素とは、演奏者に ①伝える「気持ち」がある ②伝える「内容」がある ③伝える「方法」がある と。前出の友人H氏は、「あとはもう少し表情が出るといいね」と付け加えていました。次回に向けて③をもう少し磨く必要があるようです。でも今回皆さんは、本番はプレイヤーになっていたと思いますよ。ブラボー！！